

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その23）

～「プロ野球の監督に学ぶ」～

2020年9月吉日

U12部会広島地区SV 大庭 浩資

広島県バスケットボール協会U12部会広島地区の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

また、各チームの練習におきましては、コロナウイルス感染予防に伴うガイドラインに従って活動をしていただいておりますことに、心より感謝申し上げます。

10月における「大会開催または会場におけるガイドライン」が近々出されると思いますが、その内容が一步でも二歩でも前進したものになることを願っています。

さて、話は変わりますが、日本のプロ野球もシーズンの6割が終了しました。

セリーグでは、巨人軍が圧倒的な強さで勝ち続けています。

打者部門で、打率ベスト10に一人もおらず、規定打席到達者も合計で3人であるにもかかわらずこんなに強いのは、まさに「チーム力」の賜でしょう。

一方地元広島カープはというと、打率ベスト10に3人、規定打席到達者が合計6人もいるのに下位に低迷しているのは、解説者の方がよく言われる、いわゆる投打のバランスが悪い証拠でしょう。

ではミニバスケットボールにおける「チーム力」とは、どのようなものでしょうか。

これについては、正直なところ、私はよく分かりません。でも、良いチームだと思うチームは、飛び抜けて上手な人、飛び抜けて背が高い人がいなくても、全員の方で見事に試合をコントロールします。全員が全力疾走し、声もよく出ています。

本当に、どうやったらあんなチームができるのかと、ため息ばかり出ます（笑い）。

さて、以下の記事は、今年の巨人軍の強さとともに、故野村監督を例に、指導者（コーチ）の在り方について述べています。

もちろん、野球を仕事にしているプロ野球、結果がすべてのプロ野球の監督と、ミニバスケットボールを指導するコーチについて、同じ土俵で話をすることはできません。

ただ、記事の後半部分は、我々コーチが子どもたちを指導する際、頭の片隅に入れておけばよいと思うことが書かれている気がしましたので紹介いたします。

私自身、教え、導くという名のもとに子どもたちに「こうしなさい」「こうすべきだ」と口を出し過ぎてはいないだろうか。大切なことは、子どもが自分の力で正解を見つけられるように、導く指導をしているだろうか。そのためには、普段から「問いかける」習慣や風土をチームの中に醸成させていこうかと考えさせられました。

日々、反省の毎日です。

巨人、楽天、西武でコーチを務めた橋上氏は、他チームとの決定的な違いは勝負への「執着心」の差だと見ている。ではその「執着心」は、どこから生まれるのか。

「一つはチームの緊張感、競争意識です。原監督は不振であれば坂本、丸にもバントさせ、1、2軍の入れ替えも積極的に行って若い選手を使い、チームに“ダメなら生き残れない”という危機感を植えつけました。トレードも積極的に行い、誰も安心してられない状況を作っています。その競争意識、執着心の源をたどれば、監督の威厳というものに行き着くのではないか、というのが私の意見です。選手は監督を見て野球をしているものです。ピリピリ感を作るのは監督の威厳なんです。」

橋上氏は“師”と仰ぐ名称、故野村克也氏とのこんなやりとりを例に挙げた。

楽天コーチ時代に監督だった“ノムさん”から、「なぜ選手が全力疾走しないか、理由が分かるか」と“禅質問”をされたという。

「選手が気を抜いているからですか？」と答えると「ちゃうな」とニヤリ。

「監督に威厳がなく、監督へのリスペクトを選手が持っていないチームほど、全力疾走をしないんや。つまり全力疾走しないチームは監督が悪いんや」

「全力疾走」の解釈を変えると、それは「際のプレーの強さ」、「執着心」、「集中力」に置き換えることができる。すべては監督の「威厳」なのだ。

球史に残る名将・野村克也氏は、生前、「リーダーにとってもっとも必要なのは、『指導』ではなく『問いかけ』である」と語った。

選手が求めているのに、手取り足取り指導することは、逆に、選手の自主性や考える力を奪ってしまうことになる。「このままでは失敗する」「うまくいかない」と分かっている、それが致命的なものでない限り、口を挟まず、そのまま選手のやりたいようにやらせ、その中で課題を立て、自分なりに解決する力を育てるのである。

そのためには、常に選手に「問いかけ」、質問することで思考を促し、自分なりの答えにたどり着けるようにもっていくことが大切なのである。

「問いかけ」をきっかけに、選手自身が課題を意識し、解決していく。仮に、選手が一生懸命に考えても、分からない時は、選手の話を親身になって聞いてやる。ただ、そのような時にあっても、選手より先に、指導者が答えを言うのではなく、ヒントを与えながら考えさせる。また「私はこう思うが、君はどう思うか」といった言い方を心掛ける。教えるのではなく、「問いかけ」「導く」ことが指導の目的である。

野村氏がベンチで語っていたのは、単なるボヤキではなく、選手一人一人への「問いかけ」であった。